





特 18
1833
21



繪本右衛門記二篇卷之九

目録

勝家與秀吉争而曰志

羽柴筑前守困門

竹中重治演時宜

松永久秀謀叛

信貴山落城

森傳助怪異

秀吉上月夜落城



繪本古圖記二篇卷之九

勝家と秀吉の事而曰志

系落を以て多の暮るんとて信を知り瓶中の氷を踏て天下の寒を
 知信智者の福の徴なりといふ事不後信公遠に恐れ其に城後の園上
 城入る謙信大軍を多率に城入一上方と切て登るのば「専風皮」
 城入るに強勅に柴田勝家勇たるといふ事と城の大敵を防ぎあはるる
 城に及ぶ此有信長を以言上「加勢と方の軍勢を場は」と詔へしが信
 長も安らげ思ひ強信と落せば申し「き大のちうは」先縁信公
 つさんと是角又即尤清門隴川尤近の監羽柴勝家も福系修治入道
 氏和尤京亮安後信守等も救多の軍勢を以て城を是向強ひ此本回と力
 せと城を防せ強羽柴勝家守思ひ細あはけ援兵を急用と止めし





満家秀吉
と申す
心ざると曰

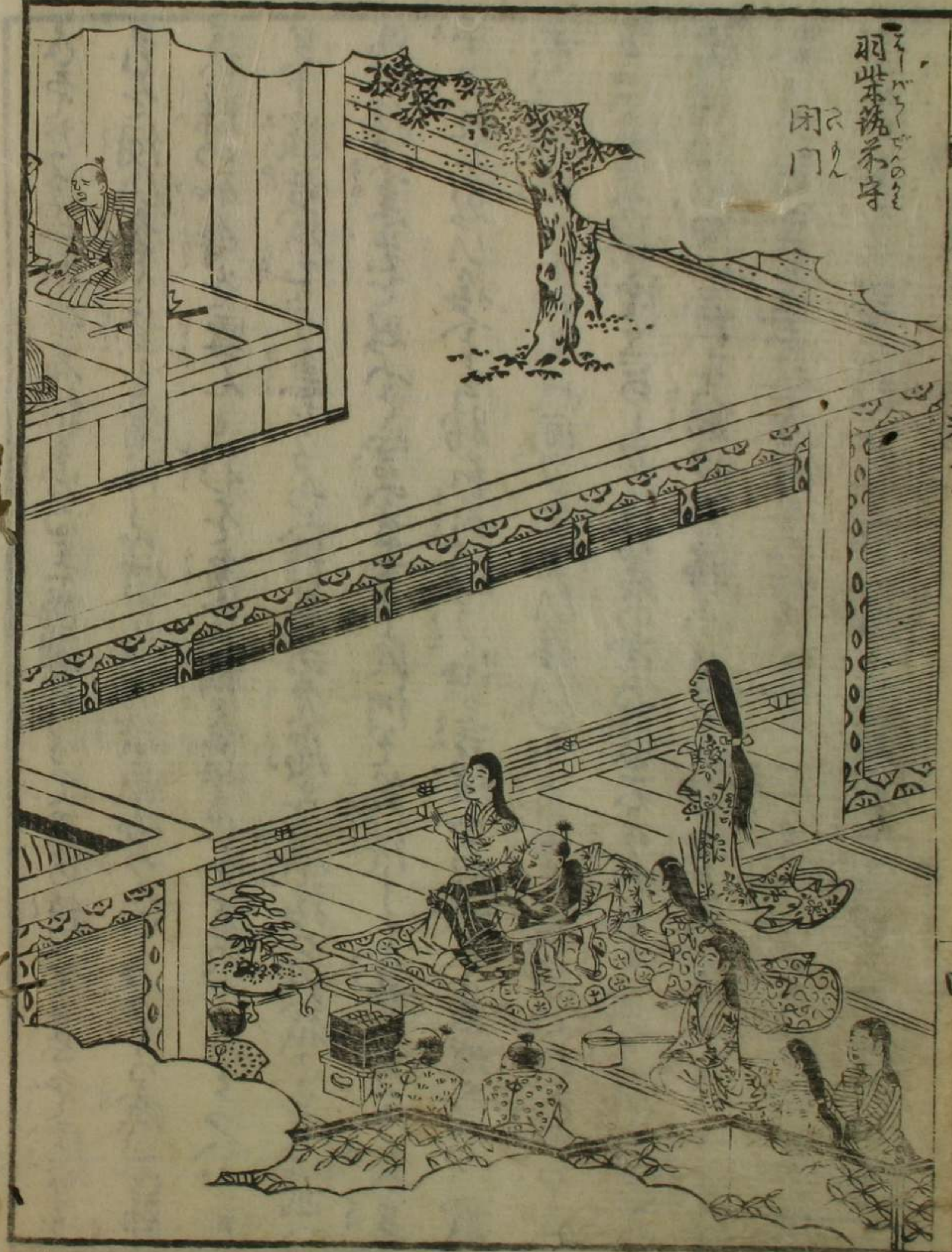
真景記二卷



真景記二卷

信長公の國に於ては諸將を統べて誠を以て振さし既而軍
 少の疾は悉く討つべし此由勝家公は信に據りて進みて食糧運送の勞を
 附し給ふぞ諸將皆言此は法願渡之中に羽柴秀吉不睦の俸にてはや
 く詞をも出さば恐くして居りたる所勝家公に是を告げ秀吉は同て是
 下を承りて言ひて我諸將の勞を謝とて下も其返言もたぐ不
 真の所候大きに候し是は必是下内心より不睦を懐とて是より明に信
 以とて秀吉公言て今日の集會我も其心より是下小國七人の藩徳と
 是く勇名海内にあぶし其名を以て是も噂を止む所多小と扱謙信
 公國は此に心とまへき之敵の難をもらん候に候兵を乞給すは何
 めぞや惟任の丹波征伐を承り是用のに及を致しやう勝川の勢及仇
 久間信盛の扱承りも扱及の番も承り皆大切の役目ありたまはく

公をたぐる氏家安藤福系等とて此國よりて君の難事其を慮り
 乞を伺ひ事を致と者何れは行を以て防ぎ給らんやちくは武國に即
 長條の恥辱を雪んと物を承り我屢此の事を君に申しとて
 是下扱兵の乞ひ急なる由は難事のを慮りて厭給り候我くと此國へ
 下し給ふ事是と思ふと心又は安し何れを笑談して真事をなさんや是
 下これを思ひ給ふと勝家公は懐くは言理あり候其理之君に誠
 義切給んと敢奉れ同力を以て給ひを自抱と扱の所は奪りて
 是は事承の功候し其のたぐは君の計お甚大なり是を思召れごそ是
 速諸將に命じ我を助け給ふよあはれや我ら公汝一人これと拒用
 にもたぐぬ事を恐れ此國より敵の向ふを厭ぎ候らば忠不倍の事お
 たらばやましくも勢を引連本國に歸りて君公守護せよ我殿にて海が



羽柴鑑茶守
閉門

助力を多はしと大なるあつて罵りたりと秀吉も怒りてさしつかへなく
まことそまがりのそまに行けりし時にもよくまゆり所旗本を守はし諸將も
匠作より力を合せ務めて功を立給ふと亦も南も皆そまへの
忠義あり私のもにまあつてと服乞して死物も死敵ども勢引合はし
にたしてゆりたりが柴田松平と並行する諸將ありけりしはの秀吉
が幼路やと憫ましく言もまうりたり

羽柴統元守閉門

羽柴統元秀吉のむ勢を引合はしに及ゆり去去の城へ系通洋まの
活牙を言はしは信長其まを換り我下知を用ひて我言も
ぬ陣せりし言流るは曲りてとて出はせ敵を止らりし小治の城ま
よりて門戸を閉てし難まは日以後秀吉と睦まうりきまは信長と睦まの

大なるいびきりし所智やあまきと眉をひそめりし汗を拭りもありと
秀吉が出陣を悔はして忌妬ひ小人の表と羽柴が後智恵の赤き尻こと
まよりととりし時中以後秀吉が家中長下のまはまき心まより
まぬりるまきと顔を何れも勝瓜よと衆依運りたりまはまき
之勢も秀吉も思ひまきりし後衆を拓たけ女をあつれ
酒宴の日を暮し疾を咽し顔も眩むまきりし後衆と居りたりまき
依て羽柴の長臣朝時跡平後須賀小六の珠の外心を痛め日以後
ぬま人のあ換りし天魔のあつたりるまきりぬま後衆強者の信長公
此の陣をほしむる所智もあまきりんと依て兩人秀吉のあつ出若
御不貞を夢りしまきり放蕩は御好後何れまきり御好の
幼いころも御閉門の御好まきりし御のまきりし御あつ

小人悪癖のあらはれて自ら瀕を拓れ給ふは如何と云ふは河を搦て保
つる小秀吉をよき多し河東秋方のよき保徳の如く来らんや抑も
永福の如し信長には寄しより万死を凌ぎし賜をのび一日一夜の
妻外もなす年月を送りぬるは今春の時来り暫く軍を引いては
てはぬ籠居ははゆいそなん兼向して死石の月を引くこそ謂ゆる
此時よ日暮の背をたし酒宴終真よ積年の疲勞を体じし海軍も
我れ仰み軍のいへはるきさかたを此間酒をも飲みおさおさ
敵英軍は喜ぶこそ肝要なれと處をたて二座おろし屈するけ
き露かじり朝時務須賀が室も何様と云ふ人の心は執程さとの入
らまりぬれ終法をば給ふのさらんといふとささささささささ
の奥方於軍の方此様を見給ひく私に朝時務須賀をば見給ひ

心配りぬるより自らも左思ひはさばおれ保徳は信長といふるのみ
や抑用ひぬる一向に真よの枕も給ふは海軍自らささささの保徳も
いふは保徳は竹中半兵衛尉を治こそ是秀吉の平生敵ひ給ふるは
此人の傳言にあらざる信聞給ふのみさささ急ぎ海軍は竹中よは
若げられぬ保徳も事よと云ふは人たはるるは我れ此人の保徳と
確と交ま較しよりさささ竹中氏に保徳宣發計いし人こそ朝時孫
平を始して務須賀堀尾加藤徳川切通坂の客お連れて竹中半
兵衛が居宅にこそと給きささ

竹中半兵衛活演時宜

竹中半兵衛尉重治と云ふは先の英徳の國を母養の幕下たりしが
今秀吉の援助を受けて小谷の城申よささるる元来智仁勇嚴兼徳



其二
真景言二篇卷九



竹中
重治
時直
演歌

真景言三

うり急使を以て返さし信長大に勢を以て返し元来松永の勇武使
し老功の者るれば等閑の敵にわらひ急を討も必死向らるる言若の如
御旗本兵勢めり今ぞ秀吉が傳言的當でを感し強ひ其強
悔ありて猪子兵助を使者として小谷の城へ遣し強ひ秀吉を拒りけ
れ此時小谷城は筑前守秀吉形のおとく桂樂を以て強ひ舞ひてあり
と承りて松永之秀謙を敵信貴山の本城は楠龍に申渡さし
さらば酒宴は真も是限敵目の安居に簡背を喜ひさうに英
を増さずとや急ぎ登城の用意はと憚り依りてうりればお中の
面、合意は心よりさう思へども常は強せく交際する所は信長
より信者入来ありて則猪子兵女秀吉の對面やせらるるこの敵とい
以り筑前守出仕を以て留置しうりとも憚り同くするのこしは同

者のおとく登城致しとの依くと述さうるは秀吉謹で返す畏れ
只今虫損登城はるべきとて先使者をゆじし即時は依の兵士と集め
急で安去に強とさるる

松永之秀謀報

羽柴筑前守秀吉安去に登城され信長と近くおあらし汝敵日の
籠居さぞ背屈しぬらんと宣ひしは秀吉謹で返さげ居指御不
直を以てさうとてとも君元来仁意厚くは喜ばれて勘事も免せらる
はと御も退屈仕るは結句敵軍の積勞を敵に英音伝言ひ勇務
日以増りてえいひは別敵強敵も物の敵もせびいと申信長と
きたりて強ひ安去は英傑なりと御慶を以て強ひ君臣の情いと濃
るる時信長の強ひ候は松永之秀謀敵して信貴山は楠龍といふ



松永 久秀
謀叛

真田言二篇

とてこれを代んや其計略をばとて秀吉長て是より松永を討て
企圖ありて敵討たれども行役のりより一時は退治はば松永を討ん
に筒井順英より者みづから松永筒井の事来國を奪ひ合戦止
時より君筒井に命じて先陣より石山本願寺に押へて並れし惟
任光秀統之間信登細河及高尾をばとてこれを助けしは松永の力
順英務貴を遣はし石山に松永を退治せし且又本願寺に押への兵
とていづれも元来法師系のものなり軍兵は出づる美濃より安
してあづみ其の君の河旗本を守護し其の根本を固めしむと
中江信長これに依りて信忠郷を大おとして大坂本陣の
お士筒井順英等都合其勢二万余騎十月朔日和忍をばとて進發に
押し松永輝久秀とらふ山城國西の國の河原とらふ百姓は多かり

徳川泰利めり細部のりいづれば農家をさういかに將軍の端と
りて放逐するの勢のりいよる運りし緒にも重なりしはつら
材室成修へもに事をもねり平治とらふ令を市に突て秘送するが
此室成修より大く軍のりい心も効するのりい集りて松永は
とていづれは實は始りて大志を託し彼美濃の國を敵とす三右衛門の國乃
商人松並正九郎といひ仲妻ありしは終り美濃一國のりいとなりしは
傲りんとて松並の氏を細せり松永と苗字を改ち三好長慶に仕て
祐等とありて智をばとて決死に思ひて三好のりい老とかりしその
信長長上と海舟松永と出會て縁ゆえ秀吉が性急をばとて松永は
向いて是より大勇を兼修し英雄たりしは是より一つありしは
明玉の那瑾ともいふと欺き多かり松永頻りに其れと同信長は



へりたる時又松永森松傳助と云は者瓜拓き海いふはして敵の圍を
 終に出大坂石山寺親寺にあり後兵隊をて後より敵を討し其
 附國と見合せて機中よりも切て此箇に勝敗を定むと云傳助は
 承して其夜密に城をさぐ大坂にて走りぬるがごとく走りぬる
 茶の好候の兵これを見咎ら追をきて搦め捕ら茶が陣へ入りけ
 ばと伝きい吹茶大に慌び自ら傳助が繩を解座より傳助河内
 中々はら松永之秀お軍を致弑害る自家に三好を殺(天中丸人
 彼が悪逆を要すはといふ者なく皆其因を喰んとん今其天罪の由
 素く小回の大軍に圍はる城せんと具々にありぬ不慮の悪人組
 一何さう命取れんよう速に信長云降参吹み流の逆を討は接
 群の恩賞瓜中揚り子孫繁栄をいじと説きせらるふ其傳助

これ又伏(小田)降参して松永を伏んと云順慶甚はび當城と攻接
 んの汝一人の力に成るとて遣兵二百余人を石山勢に出させ傳助は
 委く計を教十月九日の夜困道より城の搦めたり然とあるの
 兵士等と我に取勝を必難なく傳助伴の二百人を機中へ引入り
 叔松永を欺きて本親寺より先遣兵二百余人加勢のむじ賊る
 明後十一日大軍と以て後浩はときば敵やう小渚りるにしも
 邪智深き松永をれども更には敵を疑はたきん流び石山の後兵
 を得るより小回の大軍をお破んり掌の内はありと彼加勢の軍
 兵隊厚く御食し傳助が大功を獲稱しるおまは十日の早天より
 あるの軍兵二万余誇一日の圍を作て妻のふと松永之秀教く
 下知して防ぎ我ふ此附順慶が入る二百余人の兵は安被不



其
二



其
二

其
二

火をうけ焼立内より櫓戸用き圍を破るりのを切也いば亦も
一時は亂入城中討ち者教を知りて松永父子本丸より籠城も
不知して我ひ多ふ松永が功長入に大又即岩城小田即等之秀が本
に来り我傳助が反心して味方の勢懸く破る今南とこそ是に
際く生害は終るに我も冥途の魁仕らんと兩人若派接より又く
腹十文字に掻切て死するは松永之秀これを見んく涙を流さるく
流し去りても我傳助が反心こそ生れ替ても忘るはじ恨るし母の
傳助思ひ知りて涙を流し牙を嚙で怒り多付時よ亦も本丸に
へ々いびざ我も懐く切接はしとて天守の四方へ火をうけさせ日に
秘匿する平松の舎公出りて天守に二つなき名義を敵の物とぬん
の妬しとて微塵も打碎き腹後へ指添塞立引かせい嫡子小次郎

春之後へ血り首打落し其刀を我心を指通し又の首公抱け
猛火の中へ飛今一時の烟もぬたる之秀幼年六十八歳落しりし良
等百余人を遠く一皆生害公をりたる表をかりりては
初て信貴山落城み及びいふ信忠御勢を降し日月十二日京都
まで凱陣し終ひ二重の城に入せ終るは林佐守より今度の軍功の報と
ましく信忠御を三位中納言兵衛と経終る安去より林佐守
松井左衛門を使者とし城功を賀し終ひ籠城中筒井順慶が大功を報
大和一團を中納言順慶謹で恩を謝し其来の怨敵松永と討ち
其死地を賜りたるいふる限りは

森林傳助怪異

室に怪しむるは松永之秀が功長我傳助及之信貴山落城の後

ハ岡井順康を幕下にありて補救まぬ居るが毎夜外へ入て
枕の付が憂もちかく幻にもあはれ松永之妻の血は又深
仇は松永の向より怒るる眼達又裂実息の空のまじく傳助を以ら
まゝと我信貴山より敵を引受希成奇に防戦つるを小田の
勇兵美はも勝敗を別とざりしを汝が姦謀したるに望み
ち精と成て又子と後ぬに外憂志の生害なせり皆汝がわな
まゝ来て我の仇小修羅の塔とて此をよと飛く向く捕へんと
助忠と愛さき刀を授て薩拂へ陽空のまじく猶妻は深く愛に
これ彼を又別れ會をゆるく後二圍の巻とありて飛ね窓の
隙よりくと明後若き妻はこれに多くおどろくあり月をま
て哀に泣き又増長後の白昼とくとも松永が妾侍を付添ひ

一向馬の怒り止むに傳助今ハ赤心死に我大音はこれと罵おひ
み刀を授て踊り舞ひ抱懐とありこれ妻もあ人も甚恐怖し悉く
迎えて近寄者交にわく水穀を断て死すや三十余日終つて
天正六年十月十日信貴山落城の日にあつて叫び死に死するは
は人舌を縮めて怒とあり

秀吉上月城妻落

天正六年十月廿三日羽柴統元が秀吉信長の河下知より中團
征伐のため先掲忍下向姫治の城に入軍卒を休是し心城を小寺
及兵衛識其居る是回勘を清者なるも秀吉にて先陣を勅し秀吉
進で東城三本の城に入此城を別所小三郎長治叔父山城守相其
外隊中の玄石連秀吉を逐城中に清く食食を尽し兵を盡す

森傳助
怪異



莫顯言二符卷九

然とてもこれ別所が本心降伏せしめありて遂て毛利照元と内應し
 秀吉深く徳義に討つに期三本の城より切て出陣元と東西をこころ
 代んと計るに時秀吉軍兵を後任用の城後園の城と目し美濃軍威を
 振ふに進むに敢て敵とる者方して人質を納て降を乞者扱とせし
 此處に地いゝ東播磨ら秀吉に伏し西播磨の城より攻めしこの
 城のまゝ十月十日徳義の後園軍兵に力固く守て秀吉を攻めし
 秀吉怒り山中麻之助を命ぜり先陣と鉄桶のこゝ城とを圍美討り
 甚急に於此山中麻之助を命ぜり云々後園の城よりして元吉久
 の家臣力多衆と城兵御群より秀吉と善るみ才略あり勇名天下に
 鳴り世にとつる者はいまも永祿七年元子一家毛利の名に威を
 する山中者望海兵を集め怒を討んと屢毛利と合戦とつるも

元成智勇み家名存あり亦も中國悉く切後威勢に方と隣
 する小島勇長河津守元吉小島川左衛門元隆系等希代の勇名
 あり麻之助小勢を命ぜ敵とるの徳義京都に参り来り元吉
 徳義が一族源に即勝之を告る小田信長も属し中國征伐の魁して
 毛利を討てむ君の怒をこころを信長も山中が武勇を
 知り此れが中國平治の先陣とすし人と物知り叔とす此府秀吉
 と徳義捕らへむといひしはるる宿怒も毛利を討んと始りしは勇
 を震ひ震く下知して美三れが十月十日士卒を勵防衛徳義
 戦へし叶ひしとぞ月々よりするも此城山より岩津山にまで
 の要守ありんば又容易に落城せしお討す教日とるは後園軍威
 徳義徳中英雄の勢を信し一月の城を後港して討てむ秀吉を

秀吉
五月の
城を
妻落と

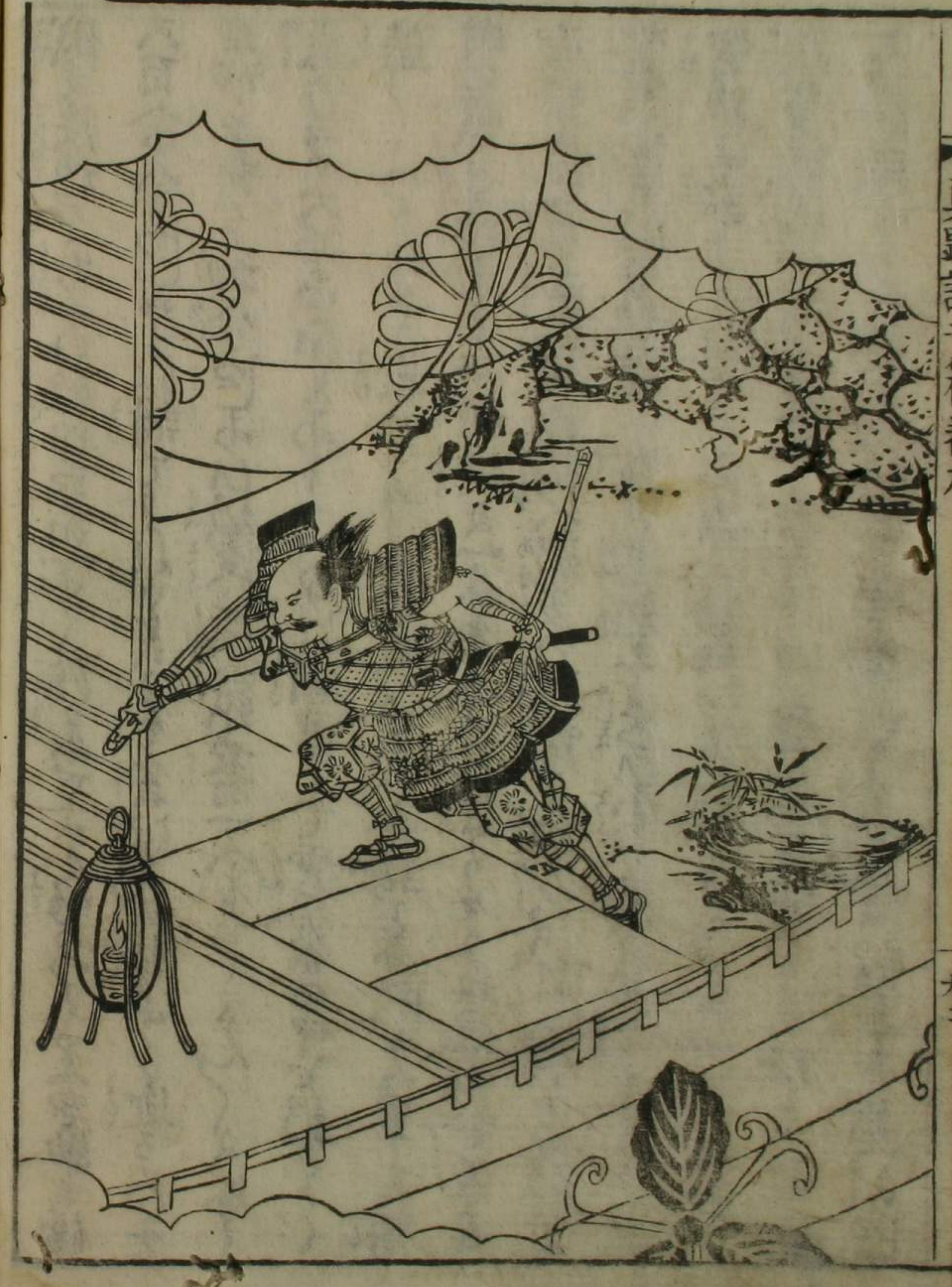


貞顯記二篇卷九

七

貞顯記二篇卷九

九



つて軍卒大さの力を失ひ、時々勢らうらうら山嶽と上月十郎
といふ者平生士卒を憐むる者たるを歴々のごとく怪んじ、是は
並く恨むを合む者多し、又山田三郎といふ者、連も籠城
のよし、思ひ、ふや、後十郎が居間、思ひ、八月十日十
郎殺日の防衛に、勞とる、あつて、籠を、搦して、却居り、後三郎おは
と、搦と、ま、あ、力を、援て、十郎が、首、打、落し、城を、破て、秀吉を、陣
と、来り、首、捧、て、降、人、と、め、秀吉、其、首、を、実、持、て、忽、虎、石、の、令、じ
て、山田、捕、首、と、別、じ、む、これ、後、三郎、を、懸、の、主人、を、害、し、籠、城、を
計、て、降、系、と、す、の、不、忠、の、者、と、して、斬、て、軍、中、に、是、を、志、す、以、
兵、士、を、悉、く、ろ、う、ひ、恐、る、と、月、の、城、兵、を、討、と、ぬ、る、と、い、ふ、が、く、も
籠、城、を、す、る、は、降、系、と、し、秀吉、に、城、を、守、る、實、は、お、ひ、と、山、中、原、之

助、危、る、勝、久、を、出、城、の、主、と、し、軍、兵、を、附、て、籠、ら、せ、後、回、り、兵、の、押、入、
に、秀吉、搦、及、み、下、向、して、二月、廿、日、後、つ、り、東、橋、原、悉、く、平、治、し、
天、心、又、年、十二、月、廿、三、日、姫、路、を、去、て、い、及、み、海、國、安、土、城、と、し、
合、戦、の、ゆ、換、を、言、上、に、及、び、し、信、長、云、其、所、功、の、速、か、る、は、感、ず、る、
秀吉、に、搦、及、を、賜、り、出、座、の、褒、賞、と、し、不、動、國、外、北、沖、の、事、に、
希、と、い、ふ、名、義、の、金、貲、賜、ふ、秀吉、面、目、を、施、し、懸、城、附、り、退、出、
年、天、心、六、年、正月、信、長、云、後、二、夜、の、右、右、居、り、昇、進、し、給、ひ、信、忠、
に、三、夜、中、お、に、叙、せ、ら、し、め、り、



繪本古圖記二篇卷之九終

一六頁二二番

七日

真言二卷

ナ四

